

母と言葉

—アルベール・カミュの初期作品世界— (6)

鈴木忠士

まえがき

第1章 アルジェリアの母と息子

第2章 『苦悩』との出会い——〈読む〉から〈書く〉へ

I はじめに

II 『苦悩』の梗概

III 『苦悩』と「家族の悲劇」

A 母の肖像——テレーズとカトリーヌ

B 母と夫・恋人・息子

(1) 母とその夫

(2) 母とその恋人

(3) 母とその息子 …… (この項の終りまで本号)

第3章 『裏と表』論

I テキストの生成過程 …… (この節のみ第19巻第4号)

II 深層のテキスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

…… (この項の、途中まで第20巻第2号、
途中から終りまで第26巻第3号)

B 祖母のイメージ

C 父のイメージ …… (この項の終りまで第27巻第1号)

III 『魂のなかの死』と『生きることへの愛』

A 『魂のなかの死』 …… (この項の終りまで第27巻第3号)

B 『生きることへの愛』

第4章 『幸福な死』論

第2章 『苦悩』との出会い

— 〈読む〉から〈書く〉へ

I はじめに

アンドレ・ド・リショー (1909—1968) の『苦悩』¹⁾が出版されたのは、1930年、または1931年のことである²⁾。1930年、ジャン・グルニエはアルジェのグラン・リセに哲学教師として赴任するが、ロットマンによると、その前年、グルニエとリショーは「一緒に暮らしていた」ことがあり、「グルニエが、1930年にアルジェに着いたとき、リショーもその少し前に、アルジェに来ていた。」³⁾

グルニエが生徒のカミュに『苦悩』を一読するように勧めたのは、第1章〔未発表〕で述べる理由によって、1931年10月以降、翌年6月のリセ卒業までの間と推定される。グルニエは、見所のある生徒に「本を貸したり与えたりした、特に新刊書を」⁴⁾と言っているから、彼がカミュに『苦悩』を勧めた動機は、おそらく、それが知友の処女作であったことと、「新刊書」であることであって、内容にかかわるものではなかったと思われる。

後年カミュは、「アンドレ・ジッドとの出会い」(1951年)の中で、この『苦悩』との出会いを振り返って、次のように述べている。「私はアンドレ・ド・リショーとは面識がない。でも私は片時として彼の美しい書物のことを忘れたことがなく、それは、母親だの、貧者だの、空の綺麗な夕暮など、当時の私が知っていたことを語ってくれた最初の書物だった。その書物は私の心の奥のあいまいもことした絆の結びよりを解いてくれ、名付けえぬままに、窮屈に感じていた桎梏から私を解放してくれた。私はいつものとおりで読み、目を覚ますと、異様な新しい自由を身につけた私が、おずおずと未知な大地に歩み出していた。私は知ったばかりだった、書物というものが忘

却や気晴らしだけを注ぎこむものでないことを。私のかたくなな沈黙、あの
 茫漠とした至高の苦悩、私を取り巻いている奇異な世界、私の身内の者たち
 の気高さ、彼らの貧苦、そして最後には私の秘め事、これらすべては、従っ
 て言^い表^わし^うる^のだ^という^こと^を！ 一つの解放、一種の真理があり、そ
 こにおいて、たとえば貧困が突如としてその真の相貌、私がうすうすのうち
 にも気付いており、おぼろげに崇めていた相貌を表わしているのであった。
 『苦悩』は私に、い^ずれ^ジツ^ドが^手引^をして^くれ^るは^ずの^創造^の世^界を、か
 い^ま見^させ^てく^れた^ので^ある。〔傍点は鈴木、断わりなき場合は以下同じ〕⁵⁾ ま
 た、1958年には、『苦悩』を介して「私は貧しい子供も、芸術によって、己
 れを言^い表^わし、己れを解放することができるということを発見したの
 だ⁶⁾と語ってもいる。

これらのカミュの言葉から、当時17,8歳の少年カミュが、『苦悩』を読む
 ことによって、「書くこととは、自分の強^{オプ}迫^{セッション}観念を秩序づけることである⁷⁾
 ということ、あたかも啓示を受けたかのようにして悟った様がよく窺われ
 る。

確かにカミュは、グルニエの『孤島』の再版に寄せた「序文」の中で、
 「『孤島』を発見したころ、自分でもものを書きたいと望んでいた、と私は思
 う。しかし、ほんとうにそうしようと決心したのは、この本を読んだあ^とで
 しかなかった。他の本もそうした決意に貢献した。だが役目がすむと、それ
 らの本を私は忘^れて^しま^った。ところが、この本は、読んでから20年以上
 たったいまも、ずっと私の内部に生きることをやめていない⁸⁾と語っても
 いる。これだと『苦悩』は、「書きたい」という思いを若いカミュに抱かせ
 た幾つかの「他の本」のうちの一冊にすぎず、しかも「忘れ」られてしまっ
 た本のうちの一つだということになる。そこには、「しかるべきときにひと
 りの師を見つけた幸運、幾年月と数々の作品を通してその師を愛し、讚美し
 つづけることができた幸運を、ありがたいと思う⁹⁾心よりする誇張がある
 のだろうか。それとも、『苦悩』との出会いを語る方に誇張があるのらう

か。いずれにおいても誇張はあるのだろう。しかし、先に引いた「アンドレ・ジッドとの出会い」の一節と、『孤島』の「序文」全体とを対比してみると、二つのテキストが語っている、「創造の世界」への、文学表現への開眼には、質的な、あるいは次元の差違があることに気付く。

「序文」が語るところによれば、1933年の『孤島』体験とは、「一つの章句が、ひらかれた書物からとびだし、一つの言葉が、まだ室内にひびいている。すると突然、その正しい言葉、正確な主音のまわりに、種々の矛盾が秩序づけられ、混乱がやむ。同時に、そしてすでに、その完全な言語への答えとして、おずおずとした、はるかに不器用な一つの歌が、存在の暗がりのなかに立ちのぼる」¹⁰⁾という体験なのであり、「ここでは、すべてが、比類のない力づよさと繊細さで、暗示されている。〔……〕彼は、表面的な気取りをもたない言語で、単純な、親しい経験を語るだけである。ついで、彼は、私たち各自の好みの解釈にまかせる」¹¹⁾ということの発見なのである。つまり、『孤島』が「啓示」¹²⁾したものは、主に、書かれたものを芸術作品として成り立たせる「言語」のあり方であり、芸術作品を成り立たせる「(語りの)調子」¹³⁾の存在なのである。芸術作品、文学表現の形式についての概念を得たということなのだ。だからこそ、グルニエはカミュが芸術の世界において最初に出会った、「ひとりの師」なのである。ところが『苦悩』の果たした役割とは、芸術家としての自覚以前のところで、カミュの盲を啓いてくれたこと、〈書く〉という地平がカミュにとってどのような形のもとに拓かれうるのか、そしてそれがカミュにとってどのような意味をもつのかということ、一挙に感得させてくれたところにある。したがって、『苦悩』という「第一次大戦中に捕虜として村に滞在したドイツ兵とフランス人士官の未亡人との短い不幸な恋愛と、はからずもその証人となった、かの女の幼い息子を題材とした、かなり紋切型の物語」が「カミュの作品のなかに、その影響を留めることはほとんどないだろう」¹⁴⁾というロットマンの見方は、「影響」ということを、文学作品の形式面に限定すれば正しくそのとおりであっ

て、「こんにちでもまだ、『孤島』のなかや、このおなじ著者の他の本に見出される章句を、まるで私〔カミュ〕のもののように書いたりいったりすることがある」¹⁵⁾というようなことは、『苦悩』についてはまったく見られないのであるが、そうしたことは別のところ、そうしたこと以前の、もっと根本的なところで、『苦悩』の「影響」は決定的なものであったのだ。

1931年10月以降から『孤島』が出版された1933年までの間に、おそらくグルニエは数多くの書物をカミュに薦めたはずなのだが、なぜ『苦悩』はカミュが終生「忘れ」ることのない「最初の書物」としての、特権的な位置を占めることができたのか。この疑問への答えは、先の「アンドレ・ジッドとの出会い」におけるカミュの回想のうちに与えられているように思われる。すなわち、『苦悩』はまず「当時の私が知っていたことを語ってくれた」のであり、ついで「私の心の奥のあいまいもことした絆の結びよりを解いてくれ、名付けえぬままに、窮屈に感じていた桎梏から私を解放してくれた」のである。同時にそれは、「私を取り巻いている」世界の「すべて」が、「私の秘め事」も含めて、「すべて」が「言い表わしうるのだ」ということを示してくれたのだ。他者の文学表現とともに、自己の文学表現のもつ、「^{オブセッション}強迫観念」または「^{コンプレックス}観念複合体から人間を「解放」する機能について、『苦悩』は悟らせてくれたのである。この意味で、「誰かが話したすと、夜があける」というフロイトの言葉を引いて、若きカミュにとっての『苦悩』体験の意義を説明しようとするヴィアラネーの見方は正しいとしなければならない¹⁶⁾。

それでは、「リショーの世界はまさしく彼〔カミュ〕の世界」¹⁷⁾なのだとするなら、『苦悩』の「世界」に対応するカミュの「世界」、とりわけその「心の奥のあいまいもことした絆の結びより」、「私の秘め事」とは何であったのか。先の「アンドレ・ジッドとの出会い」の一節を見れば、少なくともその一つとして、「母親」のことがあったとは察しがつこう。

ロットマンによると、『苦悩』は「第一次大戦中に捕虜として村に滞在し

たドイツ兵とフランス人士官の未亡人との短い不幸な恋愛と、はからずもその証人となったかの女の幼い息子を題材とした、かなり紋切り型の物語¹⁸⁾だが、「カミュは、四十女の未亡人の恋愛物語と、魚屋とかれの母との恋愛をダブらせたのではないかと推測できるが、『苦悩』を読んだのは母の恋愛事件よりも前のことであつたのかもしれない。』¹⁹⁾

第1章での推定が正しければ、カミュの「母の恋愛事件」は『苦悩』との出会いに先立っていて、1929年11月から1930年早々にかけての間の出来事である。したがってカミュが、『苦悩』の「未亡人の恋愛物語」を、そこに「母の恋愛事件」を「ダブらせ」つつ読んだ可能性は高い。

ただ、それでも、ロットマンの見方にしたがうなら、「ダブらせ」で読んだことにそれほど重要な意味はない。なぜなら、「アルベールと同様、この息子も国家保護を受ける戦災孤児である」としても、「対比関係はそれ以上続かない」からである。すなわち、「未亡人ドロンプルは決して貧乏ではなく、かの女が息子と住んでいる場所には、ベルクールを思わせるものはなにひとつない。〔……〕この小説では、苦悩は嫉妬と恥辱から生じてくる」²⁰⁾のである。

これに対し、ヴィアラネーは、そうした、『苦悩』という「小説を構成するエピソードが、たとえ彼自身の幼少年期の場面とつねに一致していなくとも、そんなことは構わない。そこで彼が呼吸しているのは同種の空気なのだ」²¹⁾として、もっぱら心理的構図の共通性に注目し、「彼女〔テレーズ・ドロンプル〕がオットー・リュルフに惹かれてしまうとき、彼〔カミュ〕は、マルタ島の魚売りであるアントワーヌ氏の訪問が、カトリーヌ・カミュにとっていかなることであつたのかを突然さとした。その訪問は、叔父のエルネストが、その不幸な求愛者を階段の下に突き落すまで続いたのだが。彼は、ジョルジュ少年の姿のなかに自分の姿を認める。恐らくは彼も、それと気づかずして、このみなし子がオットーに楯突く原因となる嫉妬を味わってきたのだ」²²⁾と言う。つまり、ロットマンが「対比関係」が「続かない」という判

断の基準の一つとした「嫉妬」こそ、主要な「対比関係」を形づくっているものだというのがヴィアラネーの見方なのである。ただ、ヴィアラネーは「母の恋愛事件」が『苦悩』との出会いに先立つという判断の根拠を明らかにしていない。おそらく、「アントワーヌ氏」という名を挙げているところからすると、「自伝的」²³⁾な色彩が強いと言われている、カミュ最後の作品、未定稿であり未発表の『最初の人間』にその名の人物が登場するので²⁴⁾、そこでの内容と叙述順序を判断の根拠としたのであろう。

以上のように、「母の恋愛関係」と『苦悩』の読書体験の関係について、ロットマンは消極的、ヴィアラネーは積極的な解釈を示している。私は後者に分があると考えているが、しかしまた、「対比関係」を成り立たせる項として、「嫉妬」以上のものもあるのではないかと考えてもいる。そのような判断の是非を云々するためには、やはり『苦悩』そのものにあたって、そこに描かれている心的「世界」の構図を詳細に吟味してみるほか術がないであろう。そこで以下においては、まず、『苦悩』の粗筋と、注目すべきエピソードを紹介する。その後で、幼少年期のカミュの心中に推定される、半ば意識的、半ば無意識的な、「あいまいもことした」心的構図と、『苦悩』における、明示的なテキストの背後に見出されるであろう深層のテキストが象る心的構図との「対比関係」如何を検討してみよう。

II 『苦悩』の梗概

『苦悩』は、長短併せて26の章から成る本文と、その前後に付された短い序章と終章によって構成されている。物語は、南フランスの或る村²⁵⁾を舞台として、1914年8月から1918年2月にかけて、つまり第一次世界大戦の4年間にわたって展開する。以下、物語の粗筋を、章を追って紹介してゆく。(文頭のローマ数字は章数を示し、()内の数字は使用テキストのページ数を示す。)

I — 1914年8月、第一次世界大戦が勃発し、アントワーヌ・ドロンヴル

大尉が出征すると、その妻テレーズ（40歳前後）は独り息子のジョルジュ（8歳くらい）を伴って、「町」(8)から、南フランスの或る村外れの一軒屋である「静かな大きな別荘」(7)に移り住む。翌「1915年6月24日」(189)に大尉が戦死すると、その報を受けたテレーズの「ショックは激しかったが、短かった。」それから「1週間」ほどして息子のはしかにかかり、それがいえたときには、テレーズは「大尉のことをほとんど忘れてしまっていた。」そして、その頃には、彼女の身の振り方は思案するまでもなく、周囲の者たちによって決められていた。「日陰にあって、死ぬまで彼女のジョルジュのために生きるのだ」(8)と。

彼女は息子を手許においておきたかったので、寄宿学校には入れず、家から小学校に通わせた。とはいえ、貞淑な戦争未亡人の「献身」というお芝居にも、半年たたぬうちに（1916年春）うんざりしてしまうのだった(10)。他方ジョルジュは、母親離れの年齢なのだが、子離れのできない母親のおかげで、母の懐の「ぬくもりへの欲求」を棄てられない。それどころか、母は息子を「自分の楽しみのために、そしてまた自分の苦しみのためにも、自分の神経症的で不安な肖像に似せて作りかえつつあった」(11)のである。

II — 1916年の夏の宵など、テレーズが「玄関の前で、長椅子に身を横たえて、自分の膝の間に息子の頭をおいて、夢想到耽って」いる姿がよく見られた(12)。そうしていると、「彼女の膝の間にある子供の重い頭が一人前の男の頭になり、そして子供のほっそりした足のはびてゆき、かげりを帯びて、若者の足のように硬くなるのだった。」欲望に悩まされるテレーズの目には、夫の遺品の「小さなブロンズ製の競技者の像」すら、生々しい男の肉体に変容して見えるのだった。そして絶望にかられて、「自分の息子に身を投げかけて、《私が愛しているのはお前だけだよ？》と言いながら接吻で息子をおおうのであった。」(13) ジョルジュは「こうした悲哀と恋情との雰囲気の中で成長していった。美しさを欠いた調度品と彼を犠牲とする母親の間で。」(14)

III — ある日(1917年春?)村にドイツ兵の捕虜たちがやってくる。村の葡萄園で労役に就くためである。その中に、「一番美しい」若者、オットー・リュルフがいた。当時24歳、「名家の出という噂」で、「背が高く、金髪で肩幅広く、腰は締まっていた」(24)。また、サッカーが「大変上手」(27)だった。

IV・V — テレーズの欲望は増々うっ積してきて、「男の姿を見ると、その性器を想像しないではいられなかった。」そうした懊悩から逃れるため、母性愛にすがろうとする。しかし、彼女自身は自覚していなかったことだが、息子は彼女にとってすでに「男」なのであり、「幾分かの汚れが母の愛を永久に損っていた」(30)のである。

「10歳」になったジョルジュが、同じ年頃のリュセットという少女と「いかなる欲望」(31)もなく、互いの身体を見較べあっているところを発見したテレーズは、生前の夫の火遊びには「その度ごとに、申し訳程度に、少しばかり空涙を流した」だけであったのに、息子のこの「男らしさの最初の印」(31)には、「嫉妬のあらゆる責苦を味わった。」(33)この「問題の現行犯」(36)の後では、ふたりはもう「怒り狂う母と恥じ入る子供」ではなく、「対等のふたり、愛し合い、一方が他方の裏切りを発見したばかりの男と女」であった(34)。

VI・VII — ある日、村を通った避難民の中から、テレーズはオルガという名の「金髪の少女」(39-40)を引き取って世話することにした。二つのベッドのうちひとつを少女に与えたので(41)、ジョルジュは母とひとつベッドで寝て「首筋に女の息を感じていた。」(43)少女は右眼がガラス製の義眼で、その「身体の障害」(45)がジョルジュを恐がらせた。

VIII — いつしかオルガとジョルジュの間には「一種の了解が成立していて、そこから」テレーズは「排除され」ていると感ずるようになる(51)。母は「嫉妬」(52)して、「どんなふうにお前はあの子を好きなんだい、私と同じくらいにかい？」と息子に詰めよる(58)。テレーズは、オルガが小銭を盗

んだので、家から追い出すと言う。それが嘘と知れたとき、ジョルジュの心の中で、「何かが彼にとって失われるのが感じられた。」(60)

IX — テレーズが盲目的な衝動の命ずるがままに、オルガを役人の手に引き渡し、二度と戦災孤児の世話をすることを断わってきた日の夜、「9月」(64)の雷雨が襲来する。いつもなら隣りの母のベッドにもぐりこんでいくジョルジュなのだが、「今夜は、彼は彼女と添寝をしに行きたくなかった。彼は、母が接吻しながら、いつものようにきつと囁くにちがいない、《死ぬとしても、少なくとも、私たち一緒にだものね》という言葉を目にするくらいなら、たった独りで恐怖のあまり死んだ方がましだと思っていた。」(63-64)嵐の夜が明けた翌朝、起きてみると、戸口の前に「男たちの大きな靴跡」と「双頭の鷲が彫りつけてある金属のボタンが一つ」落ちていた。テレーズはそのボタンを「暖炉の上に」置いた(65)。

X — オルガがいなくなって、ジョルジュは「幾日かふくれつつらをした後、あたかも何事も彼らの間に起らなかったかのように、母の膝の上にもどってきた。」(66) 彼もまた「不幸な恋人」(67)なのであり、「見棄てられた者の懐く苦しみの中で子供と女は再び出会ったのだ。」(66) ジョルジュの「想像力の美しい花々は枯れて、もう悲哀が、影のように、彼の子供時代の上へのびひろがっていった。」(67)

ある朝テレーズは、イギリスで修道尼をしている、亡夫の妹から手紙を受けとる。今では自分の親族として、兄嫁とその息子しかいないと知って、便りをくれ、ジョルジュの教育のことを心配していた。そこでテレーズは、「母の義務にもとる」(69)ことを恐れる「良心の苛責」から、また、義妹からの遺産相続の可能性を息子に残しておくという「実際の配慮」(70)から、そしてとりわけ、どちらの場合にも、将来ジョルジュに「非難」(69-70)されることを恐れて、教理問答を習いに行かせ、「最初の聖体拝領」を受けさせようと決心する。母のすすめにジョルジュはとびつく。「母親の顔以外の他の人の顔を見るためなら、彼が行かないところなどあったろうか。」(70)

XI — 1917年初秋のある夜、オットーら三人のドイツ兵捕虜が家の前を通りかかり、ジョルジュと立話をしていると、テレーズが気付いて庭に招き入れる。翌日には、「彼女は一日中オットーのことを思い出して過ごした。」「快い幸福感に充たされていた。」(77) 他方では、「彼女は息子を恐れ始めていた。〔……〕彼女は自分が犯す最初の過ちに対して彼が容赦のない残酷な裁き手になるだろうと予感していた。」(78) その日の宵には、オットーは姿を見せなかった。が、次の朝起きてみると、庭のテーブルの上に黒葡萄の美事なひと房がおいてあった。「彼女の喪は終りかけていた。彼女の上に、若さが少しずつもどってきていた」(81)。午後、彼女はムラン神父に息子への教理教育を頼んだ。その帰途、彼女はオットーに出会う。「オットーに話しかけると国を裏切っているように彼女には思えた。そして彼は、押し黙った女の目の中に自分の国の勝利を読みとっていた。」(85)

XII — テレーズの身も心も久しく前から夫のことを離れていた。「彼女は空屋同然だった、肉体も魂も。」(86) 他方オットーの方は、「1915年8月」からの「2年」間、女の身体に触れたことがなかった。「自分の横に熱く白い、四十女の重味をもつ、幾分重い肉体を想像して、愛撫していた。」(87) 翌日の朝、ムラン神父の家で、ジョルジュは初めて教理教育を受ける。感激した彼は、そのことを母に伝えようとするが、母は「何か心に奪われ、夢を見ているような様子だった。彼女の頭は他事で占められていたのだ。子供はその無関心に大層気分を損ね」た(90)。

XIII-XIV — その翌日の夜、テレーズが戸口で長椅子に身を横たえて待っていると、オットーが訪れる。お互いの欲望をはっきりと確かめ合い、ジョルジュが寝てからもう一度来るといふ男を待つ間、「テレーズはいつもの晩のように、夫の肖像写真に口づけた。彼女は幸福に酔」っていた。〔……〕彼女は夫の思い出を傷つけて罪を犯そうとしていた。〔……〕しかし彼女の心をさいなんでいたのは、そのことではない。彼女は息子や国を裏切ることになるとも思わなかった。愛、あるいはもっと正確には、愛されたい欲求、自

分以外の肉体を手の中に感じたいという欲求が彼女を盲目にしていた。』(95-96)

夜が明けて、ジョルジュが目をさますと、いつもと違って母はまだ眠っていた。「彼は自分の周囲を見て、恐れた。寝室の静けさはあまりに深かったのだ……／薄暗がりの中に横たわっている、日の光がその所々を黄金色に輝かせている、この大きな身体が彼を慄かせた。彼は死のことを恐れずには誰かが眠っているのを見ることができなかった。彼は母の顔の上に目覚めのしるしを覗いた。病気ののだろうか。これまでにこんな表情を浮かべた彼女を見たことがない。本当に彼は恐かった。』(98)

XV — テレーズは恋に夢中になって、息子のことを忘れる。「彼女は情熱以外のほかのことには一切無^{アンサンシープル}感覚^アだった。〔……〕彼女の恋は彼女を盲目にし、何も耳に入らぬ押し黙った女にしていた。彼女はジョルジュのことをかまわなくなった。』(103) そんな母の傍にいて、ジョルジュの心は「メランコリー」(102)のうちに閉ざされてゆく。「母と子の親密^{アンチミテ}さは弱まってしま^{アンディフェランス}い、彼らは「熱愛から幾分敵意をはらむ無^{アンチミテ}関^{アンディフェランス}心に移っていた。〔……〕彼らは互いに馴れ合ってしまった。彼らの共同生活の中には彼らを驚かすようなことは何もなかった。テレーズ・ドロンプルはもう自分と恋人のため^{ヴェイ・コマン}にしか生きていなかった。』(102) 他方、「ムラン神父の指導の下にある、見棄てられた子供の心の中には、とりわけ母の最初の溢れる愛がその備えをして^{ヴェイ・コマン}くれていたのだが、神の太陽がのぼっていったのだ。』(103)

ジョルジュはオットーを好かず、頑なな態度をとり続けた。11歳の誕生日の接吻も拒んでしまう。「優しい人とは思ったが、学校でも教理教育でもドイツについての悪口をあんまり聞かされすぎていた」ので(104)。

XVI — 教会で、初めての告解のとき、困惑したジョルジュは、「ドイツ野郎の接吻を拒むのは罪でしょうか」(118)と神父に言って、母とドイツ人捕虜との間に親交があることを明かす。洩れ聞いたガルデ夫人が、ことの真相を直感する。

XVII — その夜ジョルジュは、庭に居る母とオットーの話し声を家の中で独り聞きながら、「彼はこの男に嫉妬していた。〔……〕彼は彼らと一緒に
 は行かないと言ったときに、どれほど母が無^{アンディフェランス}関心にそれを承諾したか、気付いていたのだった。」(123) オルガを「ただ嫉妬だけで」追い出した母を見たとき、「自分は母とぴったり一緒になって永久に生きていく定めなんだと思ったのだった」が、今では「見棄てられている自分が分かった。」(126)「10月」のある日、屋根裏部屋の手文庫の中に、父が母に宛てた手紙を見つける。「父の手紙がもう屋根裏部屋に！」(127)

XVIII — ジョルジュは同じ屋根裏部屋で、「17世紀の自由思想家であった或る医者」の手になる挿絵入りの本で、「恋愛の何たるかを学んだ。」そのとき母のことを思うが、母の性行為の方へは想像がいかず、「私生児」を産んだ母を想像して、神が許すだろうか、世間がどんな反応をするか、と思う。「母が子供を産むかもしれないと思うと、彼は窓から身を投げたくなった。」(135)「こうして、自分の前で、自分が傍にいるのにもかまわず、母は神に背き、夫を忘れていたのだ。そんなことのために父は死に、自分は《国家保護戦災孤児》になったのだ。フランス国民に養われる身に。彼は恥辱にまみれた。彼はもう母を愛していなかった。彼女が死んで、自分はイギリスに向けて、あの叔母のもとへと、彼を愛してくれ神の友である叔母のもとへと出立する姿を想い浮かべると……」(136)。

XIX — ジョルジュの心の中では、恋人との逢瀬のことで明け暮れる母に対して「幾分かの憎しみ」(137)が、次いで「嫌悪が増していった。」彼は意固地になり、「敵意に充ちた沈黙」(138)を示す。そして「死のことを考えていた。」(139) その一方で、「狂った母」(138)は子供のことには頓着なく、恋人との別離の予感に慄くようになる。それもただ「自分の傍にもう男というものがいなくなることを」恐れていたにすぎないのだが(139)。オットーはといえば、「数年たったら、彼女は廃墟になる、と考えていた。彼女が腕の中で解体していくのを感じた。」彼が彼女に対して抱いている感情は、「若者たち

が、彼らに似ようとする老人たちに対してもつ、人を傷つけずにはおかない哀れみ」(140)だった。

XX — 秋が深まったある日、オットーは「自分とテレーズの関係が村中の噂になっているという確証を得た。彼は自分を恥じた。」(146) そしてテレーズと別れる決心をする。

XXI — オットーが、「私のことで、あなたのお国の人々の憎しみと、おそらく、お子さんの軽蔑しかあなたの身に残らないとしたら？」(150)と別れ話を持ち出すと、「40歳の女」(151)であるテレーズは、「純粋な愛とは一寸違った感情を抱いているすべての恋する女たちと同様に、すべてを愛に帰していた。」(150)「ふたりとも演じている役割に酔っていた」のだ(151)。

ジョルジュが夜半に目覚めると、「室内の静寂は底が知れなかった。子供は恐くなって、とび起きた。〔……〕母はたぶんドイツ人と行ってしまったのだ。自分を棄てていったのだ。〔……〕夜の闇は深かった。誰も応えなかった。〔……〕やっと彼はあずま屋の中で、大きな黒いマントを着て砂利の上に横たわっている彼の母を見つけた。血が手足から引いていった。〔……〕気が遠くなりそうに思えた。」(152) 彼が呼んでも「彼女は答えなかった。そこで子供は、あの男が彼女を殺したのだと思った。」(153) ジョルジュは母を助け起こして、独りで介抱する。「子供は彼女のそばにいた。彼女は醜く、年をとって^{レド・エ・ヴィエイ}いた。〔……〕彼は彼女が失神した訳を聞く勇氣はなかった。それどころか、彼女はまだこの世の人であろうか。彼女の目はどんな思いも浮かべていなかった。彼女は暖められ、飲物をのませられている不幸な牝犬の目をしていた。」(154) 夜明けがきたとき、「ジョルジュはまだ目を大きく見開いていた。そしてテレーズは深々と、ぶち殺された獣のように眠っていた。」(155)

XXII — 翌日からは、もうドイツ人捕虜も家の前を通らなくなり、母と子は誰にも会わず家に閉じこもって暮した。「朝、彼らは窓の縁にミルク・ビンを見つけた。そしてそれが、彼らがこの地上でふたりきりでないことを彼らに告げる唯一のものだった。」(156-157) ジョルジュは「すべてを忘れてい

た。彼は幸福だった。〔……〕あの夜は、彼によれば、彼のすべての夜をあがなってくれたのだった。〕(156)

「1917年12月」の冬は寒さが厳しかった。テレーズは、オットーがまだ村の近くにいると知ってはいたが、早くも「死んだ男のことを思うように」(157)男のことを思っていた。翌1918年1月早々、ムラン神父が「絞殺されて」死んでいた(159)。

XXIII —ムラン神父の葬式に母と子は参列したが、葬列が彼らの家の前を通りかかったとき、その壁に「仏独淫売宿」と落書してあるのを発見する(166)。平静を装うテレーズの心中には「恥辱と苦痛」がさかまいていた(167)。家に帰ると、テレーズは怒りから泣き喚くが、「最初、この騒々しい愁嘆場は子の心を動かしたが、こうした類の発作は彼を嫌悪させた。〕(169)

XXIV —テレーズはオットーの子を身に宿していることに気付くが、ジョルジュには黙っている。4カ月後にくる出産予定日の「4月16日」に「昇汞」(170)で「ヒロインのように死ぬ決心をしていた。」それから「もう一月がたった」(172)ある日、「レース売りの女」がテレーズの家立ち寄り。彼女は「幼児を腕に抱えて、腹は大きかった。」お腹の子は「もし彼女(テレーズ)がその前に自殺しないなら、彼女の子と同じ時に生れるという。男は前線にいる。ちょうど彼女(レース売りの女)は男から手紙を受けとったところなのだ。彼女はまだ読んでいなかった。というよりむしろ、読んでもらっていなかった。〔……〕ジョルジュは〔……〕ふたりの女の顔を見くらべた。彼女たちには共通のところがあつた。同じ疲れた表情、同じ黄ばんだ肌の色。〕(174)

XXV —テレーズは自殺の決心を翻す。「母性本能はなによりも強かつた」(176)のだ。「世間の意見」(177)などもうかまうことはなかった。ところが、彼女がおずおずとジョルジュに真相を打ち明けかけると、「子供は恥かしさで一杯になり、憎しみが喉にこみあげてきて、苦痛が胸をさいなんだ。」そして「赤ちゃんなんて持てないよ、だってパパは死んでるんだから。何て言

われることか……」(179)と言う。「片足を折って跛行している」「白痴」(181)の物乞いがそこにやってきて、ジョルジュは少し興奮がおさまり、「父の肖像写真に接吻しに行った。」そして彼は母を「いまだかつて人を嫌ったことがないかのように今や嫌っているのだった。」(182)

XXVI — 「2月」になって、「女はもう何も考えることができなくなっていた。子供がお腹の中で大きくなってきて、死ぬ気でいたことを彼女は忘れてしまった。ジョルジュは彼女の姿を見るのに耐えられないくらい彼女を憎んでいた。〔……〕彼女には勇気がないと知っていたので、彼は破局のくるのを待っていた。彼はしょっ中死にたくなかった。〔……〕彼の小さな心は永久に死んだようだった。」(184) こうして、「彼らはもはや彼ら自身の亡霊でしかなかった。第二の死を待つ引き裂かれた亡霊」でしか(185)。

「冬の終りの或る夜」(185)、すなわち「2月4日」(189)、遂にドイツ人の捕虜たちが、村を去っていく。行軍しつつ唄う歌を耳にして、テレーズは「蒼白」(185)になる。「彼女はまだ自分自身以上に彼のことを愛している」のだった。そんな母の様子を目にして、「子供は彼〔子供〕からこんなふうに——唄いながら——彼がこの世で愛している一切のものを奪ったこの男を殺したかった。」(186)

ドイツ兵を見送ろうとして、テレーズは屋根裏部屋にのぼる。だが降りるとき、「踵が階段の踏み板に引っかかったのか、それとも闇の中の手が彼女を引っぱったのか？ 不注意の刻——おそらく罰の刻がやってきたのか！ 彼女は階段を転げ落ちた。そして、毛布類をかけてあった手すりにランプがぶつかってくださった。」悲鳴に驚いてジョルジュが駆けつけたとき、「彼の母は燃え始めた羊毛の毛布の赤い、ぼやけた光の中に横たわっていた。気絶していた。血まみれの黒い穴がこめかみにあいていた。」(187) ジョルジュは「一寸の間、関節の力が抜けて、壁に釘付けにされたようになった。大きな熱の流れにおおわれて彼は動転した。身のまわりに煙を吐き散らすドイツ人たちが見えた。赤と緑のランプが金色の糸の先で踊っていた。そしてそれら

が通りすぎるとき彼の身を焼いた。強い風が家中の戸をゆすった。大砲がこめかみの所で炸裂した。光で一杯の浜辺で、炎の海辺で、彼は眠りにおちた。』(188)

終章——翌5日「金曜日」の地方紙の一面に、母親は「救出され」ず、息子は「軽いやけど」を負っただけだったが、「その精神状態はかなり不安定である」と報道されていた(189)。

III 『苦悩』と「家族の悲劇」

さて、以上のような、ジョルジュ少年を中心として展開する「この運命的な出来事アヴァンチュール、女と子が相並んで登って行ってそこで再び相まみえるこの受難の丘カルヴェール」(185)の物語と、アルベール・カミュの青少年期に、彼の心の深層に沈澱したカミュ＝サンテス家の「家族の悲劇」²⁶⁾との間の「対比関係」如何を検討してみよう。

物語の舞台は、地中海に近い「静寂と平安に充たされた、幸福なプロヴァンス地方」、「心地よい太陽の国」(6)である。『苦悩』の母と息子が「住んでいる場所には、ベルクールを思わせるものは何ひとつない」としても、その「場所」をとりまく風土には、『苦悩』を手にした少年アルベールの住むアルジェのそれと似通ったところがある。ジョルジュ少年の父もアルベールの父も、第一次世界大戦の勃発とともに出征する。当時、ジョルジュは8歳くらい、アルベールは1歳に満たず、どちらも幼なかった。父親が出征すると、残されたどちらの母と子も居を移す。もっとも、ジョルジュとその母はふたりだけで住み、アルベールとその母はサンテス家の人々と合流するのだが。アルベールの父は開戦の年に、ジョルジュの父はその翌年に、いずれもマルヌの会戦で戦死する。ジョルジュもアルベールも「国家保護戦災孤児」になる。このように見てくると、読者アルベールがジョルジュと自分を同一視しやすい条件がそろっていることに気付こう。だが、両者の境遇におけるこれらの外面的な条件の類似に内面的な条件の類似が重なることで、同一視はよ

り強化されよう。戦争未亡人となったジョルジュの母とアルベールの母は、いずれもが「恋愛事件」を起こす。前者は1917年、「四十(代の)女」(88)のときに、後者は1929年末から1930年早々にかけての間、47歳のときに。ジョルジュはその時「11歳」(179)、アルベールは16歳、一方は「思春期」(15)の入口に、他方はそのさ中にいた。

以下においては、息子ジョルジュとその両親、そして母の恋人オットー、それぞれの肖像、および母と夫・恋人・息子、そして息子と母・母の恋人・父、それぞれとにおける関係をより詳細に吟味することによって、アルベールがその両親および母親の恋人、それぞれとの間に結んだ関係との「対比関係」如何を考察してみよう。

A 母の肖像——テレーズとカトリーヌ

ジョルジュの母とアルベールの母を見くらべて、まず目につく相違は、次のようなことだろう。前者は裕福で働く必要のない未亡人であり、「ほとんど外出せず、多読家であった」(9)、「できるだけ重々しく優雅に手紙」(69)を認めることができたし、五体のどこにも障害はない。後者はといえば、貧しく、日中は「家政婦」²⁷⁾をしていて家にいず、「署名」²⁸⁾が辛うじてできただけで、「読み書きを知らなかった」し、「難聴」で「よく話ができない」²⁹⁾であった。

しかし、『苦惱』をよく読むと、これらの相違のうち、とりわけ二つの点については、見かけほどの違いはないことに気付く。まず、テレーズは「農婦」(51)の出であって、娘時代は「財産がなかった」(9)と言われているのである。次にテレーズは、しばしば、「耳の聞こえない」、「口の利けない」と形容されている。たとえば、「ジョルジュの首に愛のすべてのしるしを見せながらとびついた」オルガを前にして、テレーズは「孤独の像のように無言で不動だった。」(53) また、彼女を口説こうとするオットーの前で「無言の女」(85)であり、オットーへの「彼女の恋は彼女を盲目にし、何も聞こえず、

何も言わない女にしていた」(103)し、ガルデ夫人の悪意あるほのめかしもテレーズの耳には「何も聞こえず、物が見えなかった。」(134)そして、私生児を産むことになることとジョルジュに教えた後、テレーズは「無言で、目で許しを乞うのだった」(183)。もちろん「耳の聞こえない」、「口の利けない」という形容詞は、これらの文の中では、比喩として使われている。だが、第1章で見ると、幼少期のアルベールは、事実として母親が、その程度はともかく、「耳の聞こえない」、「口の利けない」人であったこと以上に、比喩的な意味でそうであること、つまり息子の動静に関心を示してくれているしるしのないことに、むしろ苦悩していたと思われる。母親の「無感覚」(103)、「無関心」(102, 123)についてのジョルジュの悩みはアルベールの悩みでもあった。おまけにテレーズは、しばしば「目の見えない」(16, etc.)とも形容されている。

残る相違点、テレーズが読書家であるのに比べ、アルベールの母はほとんど文盲であったことは対照的で、両者の同一視を妨げるものと見えよう。だがテレーズにとっての読書とは、無聊を慰めるだけのもので、少しも彼女の感受性の豊かさや繊細さ、あるいは知性の高さを示すものではない。彼女は「その人生の始めには、他の百姓女たちよりもたぶん幾分かはきれいな、しかしまったく変わらず偏狭な百姓女にすぎなかった」(51)し、微塵も内省的なところ、感じ易いところもなく、ただ欲望と衝動のおもむくままに行動する。彼女は「自分の感情を分析するのにほとんど慣れていない人たち」(77)のひとりであり、「彼女の頭脳は抽象的なことにはほとんどむいていなかった」(101)し、「恋と肉欲の他のことにはほとんど想像力が働かなかった」(46)のである。そしてジョルジュが、それが妊娠の徴候とは知らぬまま、自分の母と「共通な何か」を見出す「レース売りの女」は、「彼女の男が前線に」いて、男からの手紙を「まだ読んでもらっていなかった」(174)、つまり、文盲であった。

さて、さらにテレーズとアルベールの母、カトリーヌとの比較をすすめ

よう。

テレーズの容貌について読者が知ることでできるのは、「ごくありふれた顔立ちだが、醜くはなかった」(74)、その歯の「ひとつが金歯」、目の色は「青」(98)で、「幾分近視」(165)、その「髪の毛」の「幾筋かがもうすでに白かった」(177)、「赤色膿疹」が「頬」(151)をおおい始め、「黄色い斑」が「首と頬」(174)をおおっていたことである。ロットマンの『伝記アルベール・カミュ』はカトリーヌの容貌にまったく触れていないが、今日残されている晩年の肖像写真で見ると、まさに「ごくありふれた顔立ちだが、醜くはなかった」と言えそうである。いずれにしても、テレーズの容貌の描写は、彼女をありふれた「四十女」のイメージの枠内におさめるものにとどまっていると言える。

テレーズの性格は「おとなしく控え目だった」(8)、「高慢」と言われたこともあったが、「まじめで慎み深かった。」(9) だがその反面では、衝動や激情のおもむくままに振舞う、直情径行の人でもある。「抑えられた激情に目が暗」(16)み、肉体的に「愛されたい欲求」(96)に駆られると、それを充たすに何の倫理的妨げもない。「ただの一瞬も羞恥の念が思い浮かばなかった」(92)し、ドイツ兵との恋愛による祖国・夫・息子への「裏切りというものをまったく感じなかった。」(104) 自分の欲望や感情に忠実という意味では「彼女は偽善家ではなかった」(126)のであって、「嫉妬」のあまり、嘘をついてまでもオルガを追い出し、息子を他の女に奪われることをおそれて、以後、避難民の戦災孤児を世話することを断わってしまう。それは「神経」に引きまわされてのことであり、嫉妬から発した罵声も「自分のとは別の口からではなかったか」(61)と思われた。

この「激情が炎の輪で囲んでいる」(103)女、「狂った母」(138)を辛うじて制しうるのは、「世間に知れたらどう言われるか」(104)という世間体であり、世評がもたらす「恥辱」である。だが、やはり彼女の「母性本能はなによりも強」(176)いのであって、その前では「世評などなんだ！」(177)ということにな

る。そして、彼女の激情を制するものとして最後に残ったのは、息子ジョルジュへの、「容赦ない残酷な裁き手」への「恐れ」だけであったが、それすら「母性本能」の前には無力である。「私は息子を他の国へ連れて行こう。息子だけが大事だ」(177)とつぶやくとき、テレーズはまだ生まれていない「私生児」を「弟」(178)と決めているのだから、この「息子」は必ずしもジョルジュでなく、「私生児」を指すととることもできるのだ。

アルベールの母は「嫉妬」に狂ったことがあるのだろうか。また、ガルデ夫人や村人たちにドイツ兵との恋を嘲笑されたテレーズが「泣き、わめき散らし、じだんだを踏」んだ、というような「発作」(169)をカトリーヌも示したことがあるのだろうか。ロットマンの『伝記アルベール・カミュ』もこの点については何も教えてくれない。ただ、私は第1章で、カトリーヌの性格には衝動的な一面があることを推定しておいた。

それでは、テレーズが示す、「母性本能」のゆえに母であるとしても、「純な愛」(150)としての母性愛を知らず、母である前に女であり、それも恋情というよりは「肉欲」のままに盲動するという、情欲の囚としての母の姿についてはどうか。少年期のアルベールの子のうちで、カトリーヌの姿がそのようなイメージを結んだことがあるかどうか、カミュ自身はなんとも言っていないのだが、第1章で私はその可能性を推定しておいた。そのような〈母〉のイメージがあつてこそ、「あらゆる感覚の逸脱」³⁰⁾を求め、夫の友人を「挑発」するために「透明に近い薄物を着て、その下になにひとつ身につけていなかった」というような、「夜の人」³¹⁾としての最初の妻シモーヌ・イエへの恋着があり、また、その裏切りを知ったときの絶望があつたのではないか。つまり、シモーヌとの関係は、母カトリーヌとの関係の反復であり、その修復の試みであつたということだ。真相はもちろん不明であるが、後年のカミュのうちに、ある意味では自由な、自分の欲望と感情にのみ忠実で、彼女を愛する男を裏切ってしまうという、そんなタイプの女性に対する偏愛の傾向を見てとることができるのである。

「ロジェ・マルタン・デュ・ガール」(1955年)と題した長文の評論において、カミュは、『チボー一家の人々』の「真の主人公」³²⁾は一般に言われているようなジャックではなく、アントワヌのほうであるとして、後者の「肖像」を次のように描いてみせる。

「情熱をこめて肉体的に人生を愛している。〔……〕彼のなかでは、認識はつねに感覚を通じて行われる。彼の友情、彼の恋愛は肉体的なのである。〔……〕自分の思うことより感じることのほうを優先させることさえ、彼にはよく起る。〔……〕

このような身体を好むという傾向は、ときに享楽家の無気力や破廉恥にゆきつくことがある。けれども、アントワヌにあっては、二つのもの、それとともに協力しあう二つのもの、すなわち労働と強い性格とによって、彼のその傾向は均衡が保たれている。」³³⁾

そして、このようなアントワヌが「あるがままの彼自身になる」ことを妨げている、彼が「身を縮めて入りこんでいる殻をやがて断ち割るのは、ひとりの女性である。肉体を通じてでない限り、真理は肉の男のもとに達することはできない」として、その「ひとりの女性」とはラシェルであり、「彼女とアントワヌとの恋愛をめぐる挿話は、『チボー一家の人々』のなかでもっとも美しいもののひとつである」³⁴⁾と言っている。

ここで読者は、結核が発病する前までの若きカミュの「世界の中心は、サッカーと、水泳と、仲間と一緒に町をぶらつくことだった」ということを、また、『結婚』の語る「身体」の饗宴、官能の世界を思い併せて、カミュがアントワヌに共感するのはもっともであり、ある意味ではアントワヌのうちに自分の「肖像」を見出しているのだとさえ言えそうなことに気付くであろう。そうだとすると、アントワヌの人生にとってラシェルが重要な意味をもったように、アントワヌに同一化しているカミュの人生にとってもラシェルは、ラシェルのようなタイプの女性は、重要な意味をもっていたはずなのだ。

「ラシエルの肉体の輝きは、『チボー一家の人々』全巻を照らしているものであり、死の前日にいたるまで、アントワーヌはたえずその輝きに暖められつづけることになるだろう。〔……〕アントワーヌは、脇腹に快い温みを感じながら眼をさます。ラシエルが彼に寄り添ってうたた寝をしていたのだ。それからしばらく経って二人は愛人関係になるのだが、しかし、彼らはそのときすでにそうなっているものであり、脇腹を抱えあい、ひとつのより大きな生命を互いに通わせあっている。〔……〕彼女はたえず新たに出発し直す種族の人間であり、放浪の女である。彼女のまわりに発散しているものは、自由という名で呼ばれる。たしかに、それは官能の自由である。アントワーヌは、そこではじめて、肉体と精神の至高の夢にほかならぬ、かの差異のなかでの対等を発見するのである。だが、それはまたさまざまな偏見にたいする心情の自由でもあり、ラシエルはそういう偏見を相手として戦おうとすらしめないのだ。彼女はそうしたものを知らず、ただ彼女が存在するという事だけをもって、そういうものを静かに否定するのである。』³⁵⁾

ここには「肉体」の女が、「官能」と「心情」の「自由」に生きる女が描かれている。彼女が自己中心的に見えるとしても、それは「差異のなかでの対等」を保とうとする限りにおいてである。彼女が利己的でないのは、「ひとつのより大きな生命」のなかに自己の「存在」を汲みとっているからだ。「差異のなかでの対等」を求める女といっても、上のテキストをよく読めば、ラシエルは女権拡張論者とは縁遠い者として描き出されていることがよく分る。ラシエルの「肉体の輝き」が作品全体を「照らし」、かつアントワーヌがその「輝きに暖められつづける」ということ、そしてふたりを最初に結びつける「快い温み」と「ひとつのより大きな生命」、これらのことは「愛人」ラシエルの根底にむしろ〈母〉を想定させよう。アントワーヌがラシエルを介して達する「いくばくか」の「自己完成」にみられる「あるひとつの、至上の真理」とは、「他人の天性を隅々まで愛しつくすことによって、他人を自由にすると同時に、自分はあるがままの人間であることを許されていると

感じる人間の真理」³⁶⁾であるとカミュが言うとき、それは、独立した自由な個人の「自由な交わり」(テレンパッハ)を指すというよりは、むしろ分離と統合が理想的な形で成就した母子関係を原型とする「真理」であると思われる。これを見当違いの深読みと思う者は、『異邦人』におけるムルソオとマリーの関係、ムルソオと母の関係、そしてマリーとムルソオの母の関係を想起するとよい。別著で詳しく見たように³⁷⁾、ムルソオとマリーの「愛人関係」はまさに互いの身体の「快い温み」を通わせあうところから始まり、「太陽の色と欲情の炎」を備えた「マリーの顔」³⁸⁾、つまりその「肉体の輝き」にムルソオは「暖められつづける」のであり、ムルソオの母は作品全体とムルソオの人生全体に遍在するし、マリーは〈母〉の代理者なのであった。

だが、カミュによってこのように理想的にとらえられた、「肉体」と「生命」の権化としてのラシエルには、その「輝き」とは逆の、闇の一面があった。「ラシエルはその心の暗い傾斜にしたがい、アフリカへ戻ってゆく。彼女を支配しているあの謎の男に再会するために。〔……〕実際には、彼女は死に向かって行くのだ。この生者である女は死と自然な共犯関係をもっているのだ。」³⁹⁾ カミュはラシエルの「心の暗い傾斜」をこれ以上たどろうとはしなかった。カミュが踏みとどまった「傾斜」の先には、彼が省略したところには何が書かれてあったのか。『チボー一家の人々』を今度は我々自身の目で見直してみなければなるまい。

カミュが言う「それからしばらく経って」アントワヌとラシエルがもつ「愛人関係」において、玄関の外に立っているアントワヌを「中へひっぱり込み、男のうしろに戸をしめた」のはラシエルであり、また「彼女のほうからアントワヌの唇に口を投げてきた」⁴⁰⁾のだった。

アントワヌが「欲望をかくすことを知らない〔……〕いかにも貪欲な子供らしいようす」⁴¹⁾を示し、「片いじらしい」⁴²⁾「子供」⁴³⁾とラシエルの目に映ったとすれば、ラシエルは「どんなことでもあけすけ」で、「動物的な微

笑」⁴⁴⁾を浮かべ、「自由で嬉嬉とした、そしてはむかえないほどの欲情」⁴⁵⁾を率直に表わして、「どんなでたらめでもやってのけたいと思って」⁴⁶⁾いると言う。ふたりは好一对の「愛人」同士と見える。

だが他方でラシエルは、「謎のような眼差し」⁴⁷⁾をし、「知らない人」⁴⁸⁾とアントワーヌに見えることもある。彼女はアフリカの「男女の道」に、「沈黙の行ない——神聖な、同時に自然な行ない、根本的に自然な行ない」⁴⁹⁾に魅了されていると語る。そして、「老人たちのあいだで年を取りたくない〔……〕いつもまわりに、若い人たち——若い、自由な、そして官能的な肉体を持った人たちを持っていると確信していきたい」⁵⁰⁾と語る。

「あたしまったく自由ですの」⁵¹⁾とラシエルは言っていた。だが、彼女が所用でアフリカに発つという日、「青ざめて、老けてしまった」彼女の、荷物のすべての上に「R・H」⁵²⁾という文字が記されてあるのにアントワーヌは気付く。Hとはイルシュ(Hirsch)の頭文字で、ラシエルによれば、イルシュは「人間じゃない」⁵³⁾、「とても底のわからない人」⁵⁴⁾である。その「人をひきつける力」にひきまわされ、3年もの間、ラシエルは彼の「あとを、まるで彼の飼犬のように、彼の影のようについて行った」のだが、その挙句、「どこへでも出てうせろ。そして、帰れといったら帰ってくるんだ」と「追い出」されてしまった。それが今「あたしにこいと言っている！」⁵⁵⁾それで「いままで好きになったことがなかったみたいに好き」⁵⁶⁾なアントワーヌを棄てて永久に去ってゆくのだ。イルシュは自分の娘クララと近親相姦の関係にあり、それがゆえに娘とその夫であるラシエルの兄を、平然と死に追いやった男である。クララとイルシュのことを、「女があればほど憎々しように男のことを口にだすのは、それは、^{エル・ラ・トゥー・ジュール・ダン・ラ・ボー}相変らず男に夢中ってことの証拠よ！」⁵⁷⁾と言うラシエル自身、「あたし、あの人を憎んでいるの。そして、あの人がかわいの。〔……〕ことによったら殺されるのかもしれない……あの人、とてもやきもちやきなんだから」⁵⁸⁾とイルシュのことを語るのだ。彼女のどこに「自由」があるのだろうか。彼女は結局、イルシュと別れた「2年まえまで」と

同じで、「自由じゃなかった」⁵⁹⁾のである。「あたしのからだには、思い出がないのよ」⁶⁰⁾と言っていた彼女もまた「男を相変らず肌の中に宿している」のであり、明らかにサド・マゾヒスチックな「自分自身の情熱」⁶¹⁾の奴隷なのである。ラシエルとアントワヌの、「差異のなかでの対等」という関係の裏には、ラシエルとイルシュの、いわば「同一性のなかでの支配と隷属」の関係が隠されていたのである。それがラシエルの「謎」であった。

なぜカミュはラシエルのこのような「心の暗い傾斜」を深くたどってみせようとはしなかったのか。表の「自由」な「肉体」を強調し、理想化するためであったとして、それは意識的な操作であったのか、それとも無意識的なものであったのか。いずれにしても、このような裏と表の二重構造は、カミュ文学の本質をなすものである。別著で述べたように⁶²⁾、たとえば『異邦人』のムルソオとその母の間の、「優しい無関心」⁶³⁾とも言うべき表の関係の背後には、裏のサド・マゾヒスチックな「同一性のなかでの支配と隷属」を読みとることも可能なのである。

それはともかく、以上のようなラシエルの肖像の中に、ジョルジュの母の似姿を見ることもできよう。またテレーズには、あらわなサド・マゾヒスチックな傾向は見出せないが、彼女のいわば影としての息子ジョルジュの、彼女に対する態度のうちには、後に見るように、そうした傾向が認められるのである。

テレーズは他方で、その恋愛における振舞いにおいて、ちょうどエンマ・ボヴァリーがそうであったように、通俗的ともいえる一面を示す。「ロマンチックな言葉が彼女の思考を、知性のない多くの女たちのそれを導くように、導いていた」(104)のであり、オットーとの別れに際しては、自分の「演じている役割に酔い痴れ」て「40歳の女が息をはずませる小娘になっていた。」(151) オットーの子を宿していると気付いたときは、「悲劇の女主人公として死ぬことの心構えをしていた」し、「自分の置かれた状況がもつ劇的なもの一切のとりこになっていた」(171)のである。

アルベールの母にこのような「ロマンチック」な側面があったであろうか。『伝記アルベール・カミュ』には、それを判断するに足るものは何もない。ただ、処女作『裏と表』に至る過程での草稿のひとつである『貧民街の声』には、いくつかのディテールから、アルベールの母の恋愛事件を素材にしていると推定されるエピソードがあり、そこに登場する「音楽によって昂揚された声」⁶⁴⁾の持主の「女」には、ロマンチックなところが見うけられる。彼女は妻ある男との「情^{アヴァンチュール}事」を、「耳が聴こえず、口の利けな、性悪で、愚鈍な弟」に妨げられて、「自分の息子のところに泣きにやって来たのだ」が、彼女が「息子」の部屋に入ってくると、「とてもよく知られたロマンス」のレコードがかかっている、その「とてつもない、愚かしいメランコリーのなかに、彼女の苦悩を抱いて入ってきた。そして彼女は語りはじめた」のである。メロドラマ的な「旋律が大きくなうねりとなって押し寄せ、大きな溜息で、この女の魂をさらってゆくのだった。〔……〕女が偉大となってゆくのを感じられた。彼女は涙をたたえ、それを献げるのだった。自分ではそうとは知らずに、彼女は幸福に達していた。旋律は、はじめためらい、やがてオーケストラ全体と一緒に爆発するのだった。それから一切が静まっていた。〔……〕そして女の声も低くなった。彼女はこう言っていた。《どうしたらいいのかねえ？ しまいに、いつか毒を飲むことになるだろうね。少なくともそれで私は静かになれるものね。》」⁶⁵⁾

「年齢^{とし}」⁶⁶⁾をとって「情事を体験し、それが彼女に不幸をもたらした」⁶⁷⁾女は、「ロマンス」の「愚かしい」「旋律」に翻弄され、通俗的なロマンのヒロインの「役割を演じることに酔い痴れ」ている。これが現実のアルベールの母の姿を多少とも写しているのか、それとも「四十女」のエンマという、一般的なひとつのカリカチュアの試みにすぎないのか。おそらくそのいずれでもあろう。終始無言で、なんの反応も示さない「息子」と、饒舌とも言える語り手との間の乖離は、それを示すものであろう。いずれにしても、若きカミュが、大きな「息子」もある中年女の「情事」を憐愍と皮肉と、「人生」

への畏敬の念とを以て見詰める視点をどのようにして獲得したか、あるいは獲得しようと努めるに至ったのか、という問いを立てることはできるだろう。

いまひとつ興味深いことがある。文脈から判断して、「醜悪な、骨ばった肉体、優美さを欠く肉体」⁶⁸⁾は「年齢」をとった「女」のそれを指すととれ、また彼女の「恋愛」は「美しさ」⁶⁹⁾とは無縁の卑俗な日常性と「愚かし」さに充ちているのだが、それにもかかわらず、「官能の自由」と「肉体の輝き」でまばゆいばかりの、一見対照的なラシエルの恋愛と相似た軌跡を描いている。「老けてしまった」ラシエルは、「いままで好きになったことがないみたいに好き」なアントワヌと別れて、「心の暗い傾斜」をたどり、「人間じゃない」、「憎んでい」て「こわい」、「やきもちやき」で「殺されるかもしれない」イルシュが「来いと言っている」というので、そのもとに、まるで「彼の飼犬」か「彼の影」のようにしてもどってゆく。他方、「音楽によって昂揚された声」の「女」も、「愛していた彼」⁶⁹⁾との「情事」を邪魔する、彼女が「とても恐れ」、「とても憎んでいた」、「いつか〔……〕彼女を殺してしまうだろう」⁷⁰⁾と思われる、「彼女を待っている性悪で残酷な弟」のもとに、「ふたたび彼女の暗黒の世界に帰って行」⁷¹⁾くのである。

B 母と夫・恋人・息子

この節では、『苦悩』におけるテレーズの、夫・オットー・息子それぞれとの関係と、アルベールの母カトリーヌの、夫・恋人・息子アルベールとの関係の「対比」を試みる。

(1) 母とその夫

テレーズは、夫が生前、浮気をする「その度ごとに、申し訳程度に、少しばかり空涙を流した」⁽³³⁾だけだった。夫の戦死の報を受けたとき、「ショックは激しかったが、短かった。」そしてしばらくすると、「大尉のことをほと

んど忘れてしまっていた。」⁽⁸⁾ 彼女は「客間の煖炉の上に」夫の「肖像写真」を置いて、それに「每晚」接吻する。亡夫を裏切っているときでさえそうするのだが、それは「単に昔からの習慣に従い続けていた」⁽¹²⁶⁾からにすぎない。彼女がオットーに出会った頃、つまり夫が出征して2年半、夫の死後では1年半たった頃には、「テレーズは彼女の肉体が夫の抱擁の思い出を保つほどには夫を愛してはいなかった。彼女は今や身も心も空っぽだった。」⁽⁸⁶⁾そしてオットーが去っていったとき、彼女は「夫を亡くしたことを嘆いてはいたが、それはドイツ人の男の消え去ったことが彼女の涙の唯一の原因であるときにだった。」⁽¹⁵⁷⁾

アルベールの母と、生前の夫との関係はどのようなものであったのか。浩瀚な『伝記アルベール・カミュ』にも、これについての言及は見あたらない。

カトリーヌは「死んだ夫の軍功章と戦功章とを金色の額縁に入れて、〔夫の死後落ち着いたアルジェ市の〕リヨン通りのアパルトマンに飾っていた」⁷²⁾というのだが、それらと並んで夫の「肖像写真」も置かれていたことであろう。

カトリーヌも、夫の戦死の報に接したとき、激しい「精神的外傷を受けた」⁷³⁾ということである。そして、幼いアルベールを前にして亡夫のことを、祖母と一緒に「尊敬をこめて〔……〕誉め称えていた」⁷⁴⁾と言われているが、それを除けば亡夫について何ひとつ息子に語り伝えてはいなかったようである。アルベールが「父親について耳にした唯一の逸話」である父親がした死刑見物さえ、それを「話して聞かせたのは、たぶん〔……〕祖母カトリーヌ・サンテスであったのだろう。」⁷⁵⁾子供には、母が父のことを「ほとんど忘れてしまった」と見えていたのにちがいない。

ここで、習作『貧民街の声』の最初の断章に登場する、母カトリーヌをモデルにしたと覚しい、「考えることをしなかった女」⁷⁶⁾について、「〔寡婦の〕哀しみはもうとっくになくなっている。彼女は自分の夫を忘れてしまった。だが、いまでも、子供たちの父親の話はする」⁷⁷⁾と語られていることを考え

併せてもよいだろう。「子供たちの父親の話」とは、「尊敬をこめて〔……〕
誉め称え」ることであつたのかもしれない。

夫を亡くしたとき、カトリーヌは32歳になろうとするところであつた。
彼女の「恋愛事件」がもとで騒動が起きたときは、47歳の頃で、夫の死後
15年経っている。これだけの歳月の隔たりがあれば、夫の死による「ショ
ック」からの後遺症がなくとも、「自分の夫を忘れてしまった」のは自然な
こととも言える。カトリーヌもまた、新たな恋人を前にして、「身も心も空
っぽだった」のかもしれない。

ただ、テレーズと、カトリーヌをモデルにしたと覚しい習作中の登場人物
との間のこのような類似には、注意が必要であるだろう。若きカミュが、む
しろテレーズを範にして、自分の習作の登場人物を造形したということもあ
りうるからである。それは直接的に模倣したということではなく、テレーズ
という虚構の人物のうちに、読者アルベールはあるひとつの原型を見てとつ
て、自分の母も、そして母との関わりにおける自分のわだかまりも、そこに
収斂しようということ、またそこに母からとともに、自らのわだかまりから
も「解放」される道もひらかれうるのだということ、無意識裡に覚つてい
たということなのである。そのような心理過程と創作への過程を前提とした
とき、『裏と表』の先行形態ともいえる『貧民街の声』において、『裏と表』
には収録されなかった「音楽によって昂揚された声」という断章があり、そ
の主要な登場人物である「女」が『苦悩』の女主人公に大変親近性のある人
物であるという事態がよく了解されるように思われる。

(2) 母とその恋人

テレーズのオットーに対する関係も、亡夫に対するそれと大同小異であ
る。なるほど、オットーが唄いながら彼女の視野から永久に姿を消そうとす
るとき、「彼女はまだ自分自身よりも彼を愛しているのだ」(186)と言われては
いる。しかし、それも結局のところ、「彼女がふるえおそれているのは、恋

しい人がとりかえしようもなく発っていきのを見ることではなく、もはや自分の傍に男というものがいなくなるということなのだ(139)し、「彼女が彼のうちに愛していたのは、彼女の肉体を満足させることのできるものすべてであり、またそれだけでしかなかった」(165)のだ。彼女が「自分自身より愛してい」たのはオットーそのひとではなく、「男というもの」でしかなかったのである。

カトリーヌにとって彼女の「恋しい人」はどのような存在であったのか。彼女の当時の年齢からすると、テレーズにとって以上に、それは「最後の男」(140)であったろうと推測しうるのみである。

(3) 母とその息子

テレーズの息子ジョルジュに対する関係については、夫の死後のことしか書かれてはいないが、それを材料として、それまでの関係についてもある程度推測することができよう。簡単に言えば、テレーズの「母性愛」(164)とは、かなり身勝手なものであったであろうということだ。

まず、夫を亡くして後、テレーズが息子をどのように扱ってきたか、見てみよう。彼女は世間から定められた「日陰にあって、死ぬまで、ジョルジュ坊やのために生きる」(8)という「献身の演技を自分に強いることに」、半年経つかたないうちに「うんざり」(10)してしまう。

彼女が「狂おしいまでに愛していた〔強調は原著者〕」のは「^{フムール}性愛」であって、そこから、「厳しい強制を自らに課すことによって息子を受愛するよう努めることで自分を解放しようと試みた」(30)のであった。だが、そのような試み自体が、彼女の情欲を屈折した形で充足させる代償的な働きをもっていたのである。

彼女は裕福であるにもかかわらず、息子を遠い都会の「寄宿学校」にではなく、村の「小学校」に入れるのだが、それはその方が「より長く」(9)息子を手もとにおいておけるからなのであった。「彼女の楽しみのために、そし

て苦しみのためにも」自分の息子を「自分の神経症的で不安なイメージに似せてつくりかえ」、「娘のように内気に」(11)しようとするが、それは「子供が一人前の男になり、彼女の愛からのがれていくのを、そうさせまいと」するからなのである。「孤独との闘い」(29)のためにか。確かに、だが、それ以上のものがテレーズの場合にはある。息子は、彼女の情欲の対象である成人の男の代理であり、適わぬ恋の埋め合わせとしての「恋の玩具」(14)なのだ。それをよく示すのが、客間にある夫の遺品の「小さなブロンズ製の競技者像」との「奇怪な愛」(13)の戯れの後、「涙を目にあふれさせ、頬をほてらせ」て「息子にとびつき、息をつまらせるほど接吻を浴びせながら、こう言った、《私が愛しているのは、お前だけだよね!》」(14)という場面であるだろう。

ただ、「自分の膝の間に置かれた子供の重い頭が、一人前の男の頭になっていた」(13)に、母子相姦的關係を、「死ぬとしても、少なくとも、私たち一緒にだものね」(64)という言葉に、「極めて強度の、近親相姦的な象徴性をもつ《ふたりの死〔心中〕》」(78)を読みとるのは、一見して『苦悩』の母と息子の上に近親相姦的な雰囲気濃厚にみなぎっているという印象を誰しもうけるであろうことからすれば、確かに一理ある見方ではあるが、テレーズに視点を置いてみれば、息子はあくまでも「男」の代理にとどまっていて、息子自体が彼女の情欲の対象になっているわけではない。彼女が「ふたりの死」を死ぬことは決してないのだ。ラシェルが「自殺しようと思ったことがある」(79)としても、「あたし、生きたいの。(……) あたしいままで、ついぞ心から死にたいなんて思ったことがなかった」(80)と言うように、テレーズにおいても、「生きまいとする硬い決意」を「母性本能」(176)が制するのである。そしてまた息子も、「ふたりの死」を死ぬことはない。「もしお母ちゃんが死んだら、僕も自殺してしまう」とは、「ひとつの嘘」(178)なのだ。確かに、生きようとする者同士が共に死ぬことはある。死のほかに生きる道が見出されないと思いなされる場合だが、その意味での「ふたりの死」の幻想

は、テレーズのうちにではなく、息子のジョルジュのうちに見出されるであろう。

このようにテレーズは、息子を無意識のうちに自らの情欲の対象に適う「男」の代理者に仕立てているから、彼女の「母性愛」は「純粋な愛」ではない。家の中には「ふたつの寝室」(32)があるのだが、そのうちのひとつに、「ふたつのベッド」(21)を並べて、「思春期」(15)にさしかかっている息子と寝て、「夜、下着を着がえるとき、もう横になっている子供に、《壁の方を向いて》、と言った」(13)というように、無自覚に息子の中の「男」を挑発する母なのである。そして、「恋愛と肉体以外のことにはほとんど想像力が働かない」テレーズは、息子がまもなく「寄宿学校」に行つて、友達をつくり、ベッドを共にする「大きい子」の「硬い脚が息子の膝に触れる」ところを、また「大きい子」が息子を「淫売宿へ連れて行く」(32)ところを想像する。さらに、「18歳になった子供」を想像して、「その傷ついた眼差しが女心の中に炎の道を切り開く」のを、「その黄金色の美しい腕をもう目の前に見る」のであり、そうして息子を「狂おしく抱きしめる」(173)のである。彼女は息子が「母に対してもちうる愛を友達とわかち合う」(32)ことに、それも「恋愛と肉体」に色濃く染められた関係で「愛」をわかち合うことに嫉妬し、「苦惱」(33)するだけでなく、息子が将来味わうであろう自由と快樂そのものにほとんど嫉妬していると言える。

リュセットと息子の「現行犯」を前にテレーズは、「ひとりの女が、もう、息子を自分から奪おうとしている」(32)という思いにとりつかれ、「嫉妬のあらゆる責め苦をなめた」(33)挙句に、「怒り狂う母と恥じる息子」との間には、「一方が他方の裏切りを発見したばかりの、愛し合う男と女」の「雰囲気」(34)がただよう。また、オルガと息子の仲の良さに「嫉妬」(52)して、息子に「あの子をどんなふうにあっているんだい？ 私と同じくらいにかい？」(58)とテレーズは問う。それというのも、「子供はもうすでに彼女にとつて、自覚はされていないのだが、ひとりの男であった」(30)からなので、

母である前に女として、「男」としての息子を他の女たちと奪い合うのである。だが、より深いところでこの母を「狂」わせているものは、「愛の玩具」つまり自分の分身が、己れを「排除」したところで味わう自由と快楽への「嫉妬」であるだろう。だからこそ彼女は、息子「を楽しませる一切のものを彼からいつも取り上げてきた」(180)のであるし、「愛の玩具」ではなく本物の「男」が与えられるとなると、「もはや自分と恋人のためにしか生きていなかった」(102)のである。そして、息子を「放ったらかし」(103)にして、「やつれていくのを」眼にしても「悪習」のせいだとして「不安もなく見ていた」(137)し、「意固地」になっている息子を見てもそれは父親譲りと決めこんで、「まったく心安らかに感じていた」(138)というように、その「無関心」(90, 123)が息子を傷つけることになるのである。

それに、母が母である前に女であろうとし、息子が息子である前に「愛の玩具」でしかなかったのだから、息子は「いまだかつて彼女〔母〕にとって何者かであったためしはなかった」(180)のである。息子の「感じやすく昂奮しやすかった」(18)のを見ても、「自分の抑えられた情念に盲目になって」(16)いるテレーズは、「年頃さ！」(18)と言って心を動かされることもない。

アルベールの母が息子を「愛の玩具」にしていたということはまったくないようである。カトリーヌは「家政婦」をしていて、息子の「世話を昼間みていた」のは祖母であり、「しかも手荒に」⁸¹⁾なのだ。だが、母親からの息子への呼び掛けが乏しくて、「極度の欲求不満」⁸²⁾をもたらす場合には、結果としては、「子どもを過保護に支配して受身的・依存的なままにひきとめておいたり、親自身の自己の延長としてのみ子どもを扱い、個人としての欲求を無視して親の自己愛的要求に任してしまうような状況」と同じく、子供を「遷延した母子共生」⁸³⁾に陥らせる傾向があるとされている。テレーズとジョルジュの場合は後者の適例であるだろうし、前者にあてはまるのが、カトリーヌとアルベールの場合と言えるのではないか。アルベールの母は、子供たちに「多分情愛を示してはいたのだが」、子供たちが「期待している

ほどにはなかった」のである。「生活は厳しく、私〔カミュ〕の母は疲れていた」⁸⁴⁾という理由は、幼少年期のアルベールにはたとえ頭では分っても、「保護もなく、母に見棄てられている」⁽¹³⁰⁾という思いは如何ともしがたかったにちがいない。

それに、「極度の欲求不満」にしろ、「過剰な欲求充足」⁸⁵⁾にしろ、問題の本質は母が子にする世話の多寡にあるのではなく、子供がそれぞれの資質と状況に応じてする母親への呼びかけ、「個人としての欲求」を母親が根底において「無視」しているところにある。見掛けの振舞いはどうあれ、心の底で子供を「放ったらかし」にしていなかったかどうか、子供の呼びかけやその様子に「何も聞こえず何も言わない」⁽¹⁰³⁾という状態ではなかったか否かが問題なのである。

さらに、そのような、母親の子供への「無関心」と関わりの深い抑うつ的な気分も、テレーズとカトリーヌに等しく認められるように思われる。テレーズが生き生きしていたのは、オットーが彼女の前にいた間だけであって、その前は、「孤独」と「献身の演技」に「うんざりして」、「幾日も幾日も、丸一日中、彼女が一度も口を開かずに過ぎていった」⁽¹⁰⁾のであり、その顔は「しばしば涙に光って」⁽¹¹⁾いて、「大きな悲哀の色が漂っていた」⁽¹²⁾のだし、その「声は悲しく苦しげであった。」⁽¹³⁾ オットーが去った後では、テレーズは「何も構わず、誰にも会わなかった」⁽¹⁵⁷⁾し、「私生児」が生まれると息子に教えた後は、息子も彼女も「第二の死を待つ引き裂かれた亡霊」⁽¹⁸⁵⁾でしかなかった。そして秋が深くなるとともに、村全体に「限りないメランコリーが重くのしかかっていた。」⁽¹⁴³⁾ まことにこの『苦悩』という作品は、母の「メランコリー」と「苦悩」に色濃く染められた「夜の書」⁽⁹²⁾なのである。

アルベールの母にも抑うつ気分が推定されるのだが、それは第1章で詳述しているので、ここでは繰り返さない。

ついでだが、テレーズとカトリーヌには、宗教に対する態度において、共

通点が認められる。テレーズは「司祭や村の信心深い女たちと付き合いはあったが、教会には決して行かなかった。」彼女には「信仰の中に彼女の愛への大きな欲求の吐け口を見出すだけの想像力がなかったのだ。」そして、「なぜミサに行かないのか」と聞かれると、「宗教の中で育てられなかったから」(46)と答えるのだった。また、ジョルジュに教理教育を受けさせる決心をしたのは、「母としての義務」の意識と「实际的配慮」(69-70)からにすぎない。他方、アルベールの母もまた、「信仰心が厚いというよりはむしろ迷信的」であって、「ミサも、それに類する何もしなかった。洗礼と最後の秘蹟。それだけだ」⁸⁶⁾だったのである。

〔注〕

- 1) André de Richaud: *La douleur*, 1968, Robert Morel.
- 2) 本稿が使用しているテキストの刊行者は1930年刊としている (*Ibid.*, p. 1.)。また、ロットマンも1930年刊としている (Herbert R. Lottman, *Albert Camus*, 1978, du Seuil, p. 66, note 13.)。だが、ヴィアラネーによると、『苦悩』初版の刊行者「緒言」には、*Le Grix* 誌1930年11月号収録論文からの引用があるということ (Paul Viallaneix, « *Le premier Camus* », *Cahiers Albert Camus* 2, 1973, Callimard, p. 38, note 1.)、とすると、早くて1930年末または翌年初めの刊行となろう。ヴィアラネー自身は1931年としている (*Ibid.*, p. 124.)。また、ダムール (J.-P. Damour) も1931年刊としている (*Dictionnaire des Littératures de Langue Française*, 1984, Bordas, p. 1930.)。
- 3) Lottman, *op. cit.*, p. 66, note 13.
- 4) Jean Grenier, *Albert Camus*, 1968, Gallimard, p. 20.
- 5) Albert Camus, « *Rencontres avec André Gide* », [1951], *Essais*, 1965, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, pp. 1117-1118. なお同論文からの引用文の訳出にあたっては、『カミュ全集』第5巻 (新潮社) の既訳を参照し、ほぼそのまま使わせていただいている。
- 6) Carl A. Viggiani, « *Notes pour le futur biographe d'Albert Camus* », *Revue des Lettres Modernes*, n°s 170-178, 1968, p. 210.
- 7) Grenier, *op. cit.*, p. 20.
- 8) Jean Grenier, *Les Iles*, 1959, Gallimard, p. 13. 以下、同書からの引用の訳文は、ほぼ既訳 (『孤島』井上究一郎訳、竹内書店新社、1968年) のまま。
- 9) *Ibid.*, p. 14.

- 10) *Ibid.*, p. 13.
- 11) *Ibid.*, p. 15.
- 12) *Ibid.*, p. 9.
- 13) *Ibid.*, p. 15.
- 14) Lottman, *op. cit.*, p. 66. 以下, 同書からの引用の訳文は, ほぼ既訳(『伝記アルベール・カミュ』大久保敏彦・石崎晴巳訳, 清水弘文堂, 1982年)のまま。
- 15) Grenier, *Albert Camus*, p. 13.
- 16) Viallaneix, *art. cit.*, p. 41. 以下, 同書からの引用の訳文は, ほぼ既訳(『直観』高島正明訳, 新潮社, 1974年)のまま。
- 17) *Ibid.*, p. 38.
- 18)-20) Lottman, *op. cit.*, p. 66.
- 21)-22) Viallaneix, *art. cit.*, p. 38.
- 23) Lottman, *op. cit.*, p. 27.
- 24) *Ibid.*, p. 33.
- 25) 本稿が使用している『苦悩』のテキストの刊行者は, 物語の舞台を「ヴォークリューズ県下, ヴァントゥー山の麓にひろがる旧コンタ平野のなかのアルタン・レ・パリュ村」(Richaud, *op. cit.*, p. 1.) と特定している。物語のなかには, 「ヴォークリューズ」, 「アルタン・レ・パリュ村」, いずれの地名も出てこないが, 「コンタ」(*Ibid.*, p. 19.), 「ソルグ川」(*Ibid.*, p. 7.), 「カルバントゥラ」(*Ibid.*, pp. 9, 23.), 「ヴァントゥー山」(*Ibid.*, p. 72.) などヴォークリューズ県下の村を舞台とすることを示唆する地名が散見され, またその他の地名によっても, 「アルタン・レ・パリュ村」と特定されうるものと思われる。これは作者リショーがその少年期を過ごした村でもあった。
- 26) Lottman, *op. cit.*, p. 25.
- 27) *Ibid.*, p. 39.
- 28)-29) *Ibid.*, p. 30.
- 30) *Ibid.*, p. 75.
- 31) *Ibid.*, p. 90.
- 32) Albert Camus, « Roger Martin du Gard », [1955], *Essais*, p. 1143. 以下, 同論文からの引用の訳文は, ほぼ既訳(『カミュ全集』第8巻(新潮社)収録, 菅野昭正訳)のまま。
- 33) *Ibid.*, p. 1146.
- 34) *Ibid.*, p. 1147.
- 35) *Ibid.*, pp. 1147-1148.
- 36) *Ibid.*, p. 1148.

- 37) 拙著『カミュ「異邦人」の世界』, 法律文化社, 1986年, 同『憂いと昂揚』, 雁思社, 1991年。
- 38) Albert Camus, *L'Etranger*, Gallimard, 1942, p. 167.
- 39) Camus, « Roger Martin du Gard », p. 1149.
- 40) Roger Martin du Gard, *Les Thibault II La Belle Saison La Consultation*, 1953, Gallimard, p. 88. 以下, 同書からの引用の訳文は, ほぼ既訳 (『チボー家の人々』3・4, 山内義雄訳, 白水Uブックス, 1984年) のまま。
- 41) *Ibid.*, p. 94.
- 42) *Ibid.*, p. 100.
- 43) *Ibid.*, p. 103.
- 44) *Ibid.*, p. 94.
- 45) *Ibid.*, p. 104.
- 46) *Ibid.*, p. 103.
- 47) *Ibid.*, p. 95.
- 48) *Ibid.*, p. 182.
- 49) *Ibid.*, p. 216.
- 50) *Ibid.*, p. 217.
- 51) *Ibid.*, p. 102.
- 52) *Ibid.*, p. 259.
- 53) *Ibid.*, p. 261.
- 54) *Ibid.*, p. 243.
- 55) *Ibid.*, p. 262.
- 56) *Ibid.*, p. 261.
- 57) *Ibid.*, p. 245.
- 58) *Ibid.*, p. 261.
- 59) *Ibid.*, p. 102.
- 60) *Ibid.*, p. 206.
- 61) *Ibid.*, p. 245.
- 62) 拙著『憂いと昂揚』, 特に第III章参照。
- 63) Camus, *L'Etranger*, p. 171.
- 64) *Cahiers Albert Camus* 2, p. 279.
- 65) *Ibid.*, pp. 279-281.
- 66) *Ibid.*, p. 280.
- 67)-68) *Ibid.*, p. 282.
- 69)-70) *Ibid.*, p. 280.

- 71) *Ibid.*, p. 282.
- 72) Lottman, *op. cit.*, p. 30.
- 73) *Ibid.*, p. 29.
- 74) *Ibid.*, p. 25.
- 75) *Ibid.*, p. 34. ただし、ロットマンは『はじめての人間』において、この逸話が「祖母の口から語ら」れていることを根拠にしている (*Ibid.*, pp. 34-35.)。
- 76) *Cahiers Albert Camus* 2, p. 271.
- 77) *Ibid.*, p. 273.
- 78) Jean Gassin, *L'Univers symbolique d'Albert Camus: Essai d'interprétation psychanalytique*, 1981, Minard, p. 213.
- 79)-80) Martin du Gard, *op. cit.*, p. 261.
- 81) Viggiani, *art. cit.*, p. 204.
- 82) E. ジェイコブソン『自己と対象世界』, 伊藤洸訳, 岩崎学術出版社, 1981年, p. 53.
- 83) 同書, p. 55.
- 84) Viggiani, *art. cit.*, p. 204.
- 85) ジェイコブソン, 前掲書, p. 53.
- 86) Viggiani, *art. cit.*, p. 205.